「仕事」を理解する営み

Towards the Efforts of understanding about "Task" in Practical Situations.

○森清善行（大阪学院大学）

Yoshiyuki Morikiyo(Osaka Gakuin University)

私が労働科学研究所に勤務したのは1961年ですが、その頃の産業界は自動化を中心とした技術革新と合理化対策に向けて大きく動き始めた頃でありました。この変革期に現場での調査に専念できたことは大変幸せであります。

技術革新の波が押し寄せる以前に用いられていた現場調査の方法は主として動作・時間研究でありましたが、機械化・自動化によってこれらの方法の適用に限界が見えて来ました。部外者には自動化設備の全体構造を理解することは到底不可能なことでありますので、作業者が操作しているその動作の意味が調査者には理解できないという悔しい思いをしていました。しかし、その動作・時間調査を通して作業者を数日にわたって観察を進めていると、作業のおおよその内容がわかってくるのです。もちろん、作業者にかなり執拗に質問をしたり、いろいろと教えてもらったりするわけです。

動作の内容がわかってくると、その作業の全容が把握でき、作業者の心身の負担の質的な側面が理解できてくるわけです。この動作・時間研究の本質は「観察」であります。

この観察には三つの側面があると思います。環境や状況の正確な観測と記述、対象者に対する詳細な観察と記述、観察者自身の鋭い自己省察です。環境や状況の観測と記述はある程度可能であります。その緻密な記述の例は飯田裕康氏の航空機事故の分析に用いたシステム解析図にその範

をみることができます。

一方、作業者を観察し記述することには大変困難な問題があります。観察者はただ何となく作業者を観察していたのでは作業者の体験と同じものを体験することはできません。それは他人の「痛み」を直接的に確かめることができないのと同じことであります。しかし、ことによれば他人の痛みを想像することはできます。それは自分自身の経験での自分の痛みの想像でありながら、それにもかかわらず他人の痛みを想像しているのです。そのことはまさに私たちの生き方そのものでもあります。

「仕事」を理解しようとするときに観察を重視するのもそこにあります。なぜその時に作業者はその「動き」をしたのかを観察者は自分に問い詰めることをします。そのことは作業者がそのようにしなければならぬ理由を観察者は想像することでもあります。また、自分の体験から作業者の動きを想像することでもあります。同じことは「物を作る」ときにも言えるのではないのでしょうか。「技」とは、実現される前に、素材に生ずべき結果を考察することである」と言ったのはアリストテレスであります。

この“技”を“仕事”と読み替えることはできるでしょう。その技の内容を観察によって読み取ることが観察者の重要な仕事でもあるでしょう。大森荘蔵氏も指摘されていますように、「他人とは、もし私がそこにいて、そこに身をおいたならば、私もおそらく同様にもつであろうような空

間的な現れ方をもつものとしての他我」であります。つまり、相手の行動に「入り込む」のであります。

このような状況を現象学派の哲学者フッサールは間主観性という概念で説明をしています。労働科学の先駆者である桐原先生は「労働者の身内（insider）になる」と表現しておられます。外部の人間が仕事を理解するということはこのような過程をたどることだと考えております。また労研ではこのような観点から徹底的に訓練されました。

こうした観察をより効果的なものにするために、研究者と現場作業者が組み、研究者の専門的知識と手法、作業者の実際の知識と経験を巧みに総合し、反映させることが肝要であります。その代表的な例として、大橋信夫氏の一連の乗船調査に関する中身の濃い分析結果があげられます。観察によって学んだ鋭い感性と豊かな想像力をもって、さらによりよい調査法を創出していくことが今後に残された課題だと考えます。